



対馬丸 通信

発行：(財) 対馬丸記念会
 発行人：高良 政勝
 編集：対馬丸記念会事務局

Tsushima maru press

平成 21 年 3 月 20 日発行 第 18 号

開館五周年を前に、展示の一部リニューアルを考えています。

今年八月二十二日に、対馬丸記念館は開館五周年を迎えます。五周年を前に対馬丸記念館の現状の課題を解決すべくリニューアルを計画しています。

ご存知のように記念館の建設は悪石島沖の対馬丸船体発見に遡ります。船体発見によって、遺骨引き揚げは遺族の強い要望となりました。それに対し政府は、対馬丸船体引き揚げ可能性調査専門家会議を立ち上げ技術的な可能性を検討、導きだされた回答が引き揚げ不可能ということでした。その後遺族の無念の想いを慰謝するために記念館建設が政府決定され、事件後六十年の節目に開館いたしました。

このような経緯から建設された記念館ですが、マスタープラン決定から開館までに十分な資料収集と展示内容の精査などしっかりとした準備期間が無いなかで開館にこぎ着けました。したがって開館後の遺影掲示の増加や犠牲者刻名の追加・訂正など、展示の根幹をなす部分での修正が毎年続いてきました。そこで、このような不具合の解消と展示内容追加と見直しを進めることにしました。

一、遺影掲示

開館当初九十七名(八十五葉)だった遺影が、平成二十一年三月現在二百三十七名(二百六十二葉)まで増え、閲覧目線の遙か上部にまで遺影を掲示している現状から、遺影

掲示スペースを拡大する必要があると考えています。

具体的には一階奥の展示スペース三ブロックで遺影を掲示していますが、船倉ベッドを移動し、現在のスペースと合わせてL型に掲示してスペースを拡大したいと考えています。

二、船倉ベッド

船倉ベッドは一階階段そばの踊り場スペースに現状のまま移動します。移動後は、蚕棚と呼ばれたベッドを入館者が体験できるように、出入り自由な体験スペースにしたいと考えています。

三、刻名板

当初刻名の元になったのは、旧遺族会が編纂し、昭和五十三年年に発刊された、「記録と証言 あゝ学童疎開船対馬丸」に収録した名簿ですが、開館後、遺族・友人などの申し入れて三三名分修正されています。現在修正部分が入館者によって一部はがされるなど見苦し



くなっています。したがって、新たに正しいデータを印刷し直し、全面貼り変えにしたいと思います。

四、十・十空襲

開館当初展示していた十・十空襲については、展示内容を変え、最終展示コーナー(現在対馬丸の子どもからあなたへ)に移動します。新たに展示するのは、当時の沖縄県庁発行(島田 叡知事の署名入り)の遺族の戦時災害二因ル危害証明書と那覇市歴史博物館より市内八校の国民学校被害状況などの資料提供をうけ制作します。これも、新たに印刷し直し、全面貼り変えで考えています。

映像 モニターは、対馬丸

発見映像の放映をやめ、沖繩戦記録フィルム一フィート運動の会より十・十空襲の映像を借り受け放映したいと考えています。

五、学童疎開

現在の学童疎開は基礎データのみの展示となっております。

資料展示の充実を計っていきます。

六、生存者の苦悩

これまでに無かった新たな展示内容になります。

対馬丸の生存者が戦後数十年も語ることが無かった苦悩とそれぞれの戦後の歩みを、象徴的なワンフレーズで紹介する予定です。

展示箇所は、ビデオブースの全面で犠牲者の刻名と対峙するかたちになります。現在の宮里さんの証言は、館内ビデオとはほぼ同じなのでカットします。悪石島のシルエットはそのまま、印刷しなおし、全面貼り変えを考えています。

七、箝口令

開館後発見され、現在一階最終展示コーナーにある遺族の高良政弘氏が、祖父母宛にしたためた手紙を二階展示コーナーの出口側面に展示します。抜粋した文面と写真で、箝口令の実態を明らかにしたいと思います。

八、対馬丸の子どもからあなたへ

展示場所を現在の最終コーナーから出口前の感想書き込みパネルでの壁面に移動、小型化したパネルで展示したいと思います。

※リニューアル予算については、遺族・協力会員の皆様からのご寄付も募りたいと考えておりますのでご理解とご協力をお願いいたします。

昨年12月7日、対馬丸記念館において「不発弾で子供の命を救おう。負の遺産を浄財に」という演題で沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」という団体の主宰をされている具志堅隆松に講演を依頼しました。いま不発弾の脅威が不幸な爆発事故で再び県民の注目を浴びています。そこで改めて具志堅氏に当日の講演要旨をまとめて頂きました。

沖縄の不発弾で子供の命を救おう

負の遺産を浄財に……

NPO 県民の手による

不発弾の最終処分を考える会

沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」

事務局長 具志堅 隆松

現場から見てきたもの

私は、これまで遺骨収集を続けて25年余りになりますが、最初の頃は出てくる遺骨をただやみくもに収集するだけでした。それが経験を重ねるにつれ、発掘現場の状況や出土物から、当時の様子が推測できるようになりました。壕内の収集でよく見られる、上半身が無い遺骨の原因が解つたときはショックでした。なぜ上半身が無いのか、それは手榴弾による爆者の遺骨なのです。日本軍は兵士に手榴弾を2個与え1個はアメリカ兵を殺すため(戦闘用)、もう1個は捕虜になる前に自分を殺すため(自爆用)に使えと命令しています。壕内の上半身の無い遺骨は、この命令を忠実に守った人たちなのです。そしてその遺骨の傍らには、アメリカ兵に対して使うことのない手榴弾が残っています。あまりの理不尽さに遺骨の前にたたずみ思ったことは、自殺

を教育・命令することはいかに軍隊といえども、絶対に間違っている、そしてこの事実には知られるべきだということです。ただ言葉だけで伝えるのではなく、彼らが残した手榴弾でもって、沖縄戦で手榴弾がどのように使われたのかを告発する物証にするべく、火薬を抜き取り無害化し、活用の準備をしようとしているところ、新聞報道で国が「不発弾の最終処分」を営利事業として企業にゆだねるといふ記事が掲載されました。これはとんでもないことです、沖縄に

不発弾があるのは戦争が原因です。不発弾の処分は沖縄戦の戦後処理に他なりません。企業を儲けらしためでなく、最後まで国が責任をもつてやるべきです。いま国がやるうとしてい

ることは、極端な言い方をすると自決者の残した手榴弾を、今度は企業にこれで儲かって下さいといつて渡すようなものです。そこには戦争に対する反省は全く感じられません。人殺しや自殺の使い残り金儲けをしようなどとは罰当たりもいいところでは

転の発想でNPOのアイデアがひらめきました。ただ反対するだけでなく国が金を払うというなら、金儲けではなく沖縄戦の当事者である県民による「非営利事業」であることを請け負えば、そのお金を命を救うことに使ってもよいのです。

「不発弾に沖縄戦で奪った命の責任を取らせることが出来るのです」

そして、命を救う対象を子供にすれば過去の負の遺産で、未来のある子どもの命を救えるのです。

そう考えたことがきっかけで「県民の手による不発弾の最終処分を考える会」を設立し、この運動を始めました。

「不発弾の最終処分」というのは自衛隊が行っている「不発弾処理」とは違います。ロンドン条約で海洋投棄ができなくなった「不発弾処理」後の、信管を取り除かれた不発弾を、鉄と火薬に分解することなのです。ですから自衛隊がやっていることをやろうという訳ではありません。この計画には自衛隊の不発弾処理班のOBや専門家から手伝いたいとの申し入れ

があり、技術面、安全面は自信を深めています。足りないのは県民の声です。

我々県民は沖縄戦の当事者として、不発弾がどのように処分されるか見届ける義務と責任があります。私たちの活動趣旨に賛同していただき、企業に金儲けに供するのではなく、この「不発弾の最終処分」という国庫予算が、命を救うための財源になるよう広く訴えます。

※具志堅氏への連絡先は、

【県民の手による不発弾の最終処分を考える会】代表 具志堅隆松

電話090・3796・3132

〒900・0012

沖縄県那覇市泊1-28-3

サントピア泊501

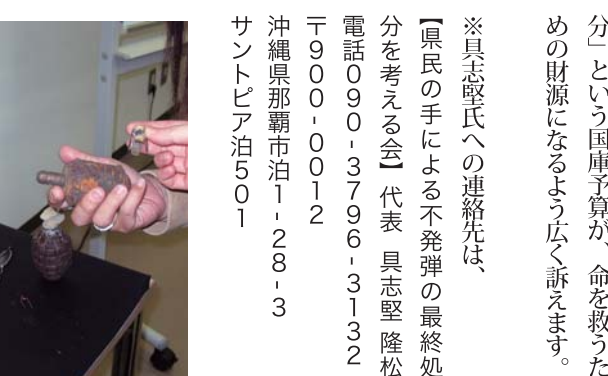
1900・0012

沖縄県那覇市泊1-28-3

サントピア泊501



る反省は全く感じられません。人殺しや自殺の使い残り金儲けをしようなどとは罰当たりもいいところでは



は、この命令を忠実に守った人たちは、アメリカ兵に対して使うことのない手榴弾が残っています。あまりの理不尽さに遺骨の前にたたずみ思ったことは、自殺

をしようとしているところ、新聞報道で国が「不発弾の最終処分」を営利事業として企業にゆだねるといふ記事が掲載されました。これはとんでもないことです、沖縄に

る反省は全く感じられません。人殺しや自殺の使い残り金儲けをしようなどとは罰当たりもいいところでは

る反省は全く感じられません。人殺しや自殺の使い残り金儲けをしようなどとは罰当たりもいいところでは

る反省は全く感じられません。人殺しや自殺の使い残り金儲けをしようなどとは罰当たりもいいところでは

沖繩歯科インプラント研究会より寄付

沖繩歯科インプラント研究会 (宮城正廣 会長) では会員の提案で「忘年会を単なる飲み食いだけにするのでなく、医院や家庭で不要になったものを持ち寄り、オークションにかけ、その収益金を対馬丸記念館に寄付しよう」ということで3年前から対馬丸記念館に寄付を行ってきました。昨年暮れも那覇市安里の栄町「べんり屋」で忘年会を行い、オークションの収益金二十五万円を対馬丸



記念館高良政勝館長(インプラント研究会会員)に手渡した。

大城立裕先生の「対馬丸」朗読CD発売中!!

「おーでいおぶっく」全国発売 M・A・P 東京社

沖繩の名作朗読で

耳で聞く書物「オーディオブック」を手掛ける東京のM・A・P(高山正樹代表取締役)がこのほど、沖繩関連書籍に特化した「おきなわおーでいおぶっく」シリーズを制作し、全国発売した。第一弾は沖繩初の芥川賞作家・大城立裕氏の「カクテル・パーティー」など二作品。今後も多彩に作品化を進める計画で、違ったスタイルの読書の秋を楽しめそうだ。



「おきなわおーでいおぶっく」を制作したM・A・Pの高山正樹代表(左)と宇夫方路さん(琉球新報社)

CDでの販売形態を採用しているが、インターネット配信も視野に幅広い普及を目指す方針だ。第一弾を飾るのは芥川賞受賞作「カクテル・パーティー」と「対馬丸」の中で大城氏が執筆した「撃沈」死とたたかう漂流を抜粋した作品。今後、知念正真氏の岸田戯曲賞受賞作「人類館」、大城氏の「プロエスタ鉄

「若い人に歴史伝えたい」シュガーローフの会・具志堅代表 対馬丸記念館を訪問



対馬丸記念館を見学する具志堅代表(右から3人目)＝6日、那覇市若狭の対馬丸記念館

太平洋戦争開戦日の八日を前に、シュガーローフの会の具志堅青鳥代表(右)が、那覇市若狭の対馬丸記念館を訪れ、展示物を見学した。当時のランドセルやその中身、救命胴衣などから当時の悲劇に思いをはせた。具志堅代表は「対馬丸のことはたくさん子どもたちが犠牲になった沖繩にとって大きな歴史だ」と語った。「シュガーローフでの戦いを起点として活動しているが、今後は嘉数高台や浦添などの激戦地も回ることで若い人たちに戦跡を伝えたい」と話した。泊小学校の山入端悦子校長も同行し、同校の八十三人の児童と三人の引率教諭が犠牲になったことなどの説明を受けた。山入端校長は「先輩が犠牲になってくれたのを初めて知った。学校で先生や児童に伝え、見学に来たい」と話した。具志堅代表らは小桜の塔も訪れ、犠牲者の冥福と平和への祈りをささげた。

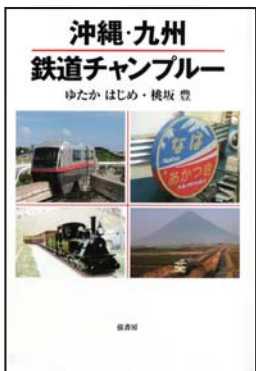
『沖繩・九州鉄道チャンプルー』

ゆたかはじめ・桃坂豊共著/弦書房/本体千九百円+税

対馬丸記念会評議員で、鉄道マニアとしても知られる、エッセイストのゆたかはじめさんが、同じ九州の鉄道に詳しい桃坂豊さんと共著で『沖繩・九州鉄道チャンプルー』という本を出版されましたので紹介します。

「鉄道ばなし」、「鉄道はジョー」と、「ゆいレール沿線観光」という三部構成で、鉄道ばなしと題されたお二人の対談は、先ほど惜しまれながら消えていった寝台特急「なは」号のことから始まり、戦前の軽便鉄道から大東島のサトウキビ列車、はたまた「ネオパークおきなわ」の園内遊覧鉄道などどま

ることを知りません。好きだからこそ語れる楽しさと、車社会の沖繩に対する真摯な提言などもあり、行政がその気にさせなれば、沖繩にも鉄道が走る未来の夢が描けると、いろいろ楽しませてくれる一冊です。



▲琉球新報 平成20年9月23日(朝刊)

記念館運営日誌

視察

□1月19日

内閣府政策統括官（沖縄政策担当）付 多田健一郎参事官（企画担当）、随員 内閣府沖縄総合事務局総務部調査企画課 立津智史調査第三係長



来館

□2月9日

那覇南ロータリークラブ（会長 上原信行）一行12名。



イベント

□12月16日～□1月15日



内閣府第11回特別展『対馬丸児童に捧ぐ』世界の平和児童画展』が昨年に引き続き企画展示室を会場に開催されました。

今回から上位入賞作に加えて、県内児童の出品作を多数展示し、好評を博しました。

□2月15日

第十一回ちやーがんじゅう講座「島人の肝心」沖縄の昨日、今日、そして未来」が、開催されました。

講師の崎原真弓さんはうちな一の文化、肝心（ちむぐく）をライフワークとして伝承する「カリスマ・スパーガイド」として県内外で活躍されています。

当日は独自の「早変わりスタイル」でオバーが語る一人芝居を熱

演じていただきました。氏の平和への熱い想いが会場いっぱいに伝わり、涙とともに観客ひとり一人に平和へのメッセージが確かに届きました。



一人芝居を熱演する崎原真弓さん(右)と、愛(カナ)さんずの皆さん(上)

ご寄附

□11月10日～2月9日

屋良朝光、渡口眞常、中津川市立阿木高等学校、高良政勝、外間邦子、上原妙、琴の音保育園、稲嶺成祚、儀間真勝、沖縄歯科インプラント研究会、大熊歯科医院、嶋田玲子、高良盛吉、(株)M・A・P、那覇南ロータリークラブ、平良啓子、

以上の方々からご寄付をいただきました。心よりお礼申し上げます。

対馬丸記念館創立五周年 悪石島慰霊・感謝の旅(予定)

今年、平成二十一年八月二十二日に対馬丸記念館は開館五周年を迎えます。また対馬丸撃沈から数えて六十五年目となります。

(財)対馬丸記念会では、悪石島の皆様に対する感謝と慰霊の旅を実施すべく、ただいま計画中です。

遺族や生存者、語り部の方々にご参加頂き、10名ないし15名の慰霊団による、同島慰霊

参加条件

犠牲者の遺族又は生存者・語り部で、ご自身身の回りのことは出来る方。ある程度できる方については一名の介添え者の同行を認めますが、行動に責任を持つ方。(悪石島には医療機関・医師は不在です)

参加費用

全額自己負担となります。(飛行機、船、民宿、食事)お一人十二万円程度。(人員決定後再見積)

日程

平成二十一年八月二十二日を挟んだ三泊四日(最低必要日数)程度
最低催行人数 十人

お問合わせ

財団法人対馬丸記念会 事務局
電話 098-941-3515